

一

次の——線部①～⑧のカタカナの部分漢字で、⑨・⑩の漢字の部分ひらがなで書きなさい。いずれも一画一画をていねいに書くこと。

二度目の東京オリンピックも、いよいよカイマクを迎えることになった。

果たしてこれだけの分量の書類をイチランしただけで理解できるだろうか。

関係機関によるササツによって、この部門には不正がないことが明らかになった。

日本のリヨウユウする海域にはさまざまな天然資源がある。

祖父の遺産に対する相続税のエンノウを願い出ないと、とても一括では支払えない。

日本の古典芸能では古来より、流派の家元のことをソウケと呼ぶ。

政治家は国民の思いがどこにあるかリュウイして事に当たってほしい。

戦場にいた夫がジヨタイするという知らせを聞いて、一日も早く戻ってきてほしいと願う。

そんな幼い子どもの言うことを目の敵にしてしかるんじゃない。

一念発起し、人々の幸せを願って大仏を建立した。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

高校三年生でサッカー部員の宮島大地（Ⅱ「ぼく」）は、中学に入学したころ母と死別し、独身の伯母さん（Ⅱ母の姉である絹子）に引き取られて、二人で暮らしている。六月の日曜の午後、伯母さんの交際相手の男性（Ⅱ田崎さん）が、二人の家にやって来た。

その田崎さんを見て、あっ！と声を上げそうになった。よく覚えてたな、と自分の記憶力に感心した。小さなレンズの丸メガネ。それで気づけたのだろう。田崎さんは、五月にあった総体予選の試合を観に来た人だった。部員の誰かの父親だろうと思ったものの、結局誰の父親かはわからなかった、あの。誰の父親でもなかったわけだ。ぼくの関係者だったんだから。

「初めまして。田崎康雄です。製 A 会社で働いています。新聞とか本とかカタログとか、そういうものにつかう A をつくる会社です。絹子さんにはお世話になってます」

その初めましてで、田崎さんが自分の観戦にぼくが気づいてないと思ってることがわかった。だからぼくもそのことには触れず、同じ言葉を返した。

「初めまして。えーと、大地です」

(中略)

「大地くんことは、絹子さんから聞いてるよ。何一つ問題を起こさない、よく出来た高校生だとね」

「そんな言い方、してないわよ」

「してないけど。でも僕はそんな印象を持ったな」

よく出来た高校生。苦々しい。そんなようなことを言ったのだとしても、伯母さんは、面倒のないやつ、というくらいの意味で言ったんだと思う。実際、面倒はないはずだ。例えばぼくは、つかった鍋や食器は伯母さんが帰宅する前に必ず洗っておくし、これは伯母さんが知らないことだけど、しずくが床にはね落ちないように、小便是洋式便器に腰かけてする。

田崎さんは、どこからどう見ても、よさそうな人だった。角刈りに真っ黒なサングラス、みたいな人や、長髪に真っ黒なレザーパンツ、みたいな人が来ても、ぼくが伯母さんの相手として認めないなんてことはなかったはずだが、この田崎さんなら申し分ない。百点と言っていい。偏差値七十と言ってもいい。ただ、そういうのとは別のところで、ぼくは限界を迎えつつあった。言われるくらいなら先に言ってしまうおもうと思った。そう。あのことだ。田崎さんが総体の試合を観に来たこと。試合の始めから終わりまで自分がベンチに座ってるのを、見られてしまったこと。

もう伯母さんに話は伝わってるのかもしれない。とつくにバレてるのかもしれない。それでも、指摘されるよりは自分で言うほうがまだ。

ぼくは田崎さんに言う。田崎さんを通して、伯母さんにも言うつもりで。

「総体の試合を、観に来られて、ましたよね？」

慣れない敬語をつかうので、言葉がたどたどしくなる。途切れ途切れになる。

「ソウタイ？」

「あの、えーと、五月の試合。ゴールデンウィークの」

「ああ。総体、か。総合体育大会、だ」そして田崎さんはあつけなく認める。「うん。観に行かせてもらったよ。何だ、気づいてたのか」

「さっき、もしかしたらって」

「すごいな。あのときはまだ面識がなかったのに」

「部員の誰かのお父さんかと思ったんですけど、誰のでもないみたいだったから」

「そうか。誰の父親でもないとなると、近所のサッカー好きなおじさんか、でなきゃ不審者ってことになるもんね」

「何、田崎くん、観に行ったの？」と伯母さんが尋ねる。

「うん」と田崎さんはやはりあつけなく答える。「大会があるって聞いたから、観に行かせてもらった」

「言つてよ」

「言つたら、行くと言われるかと思つて」

つまり、そういうことだった。田崎さんは、伯母さんにも内緒で、ぼくの試合を観に来たのだ。ぼくの試合を。ぼくが出ない試合を。

「一人では行かないで、とは言つてたと思うけど」と伯母さんが言う。

一連のその反応は、とても演技には見えない。

「悪いとは思つただけだね。見てみたかったんだよ、大地くんを。何ていうか、一人で。といって、どんな子が確かめたかとか、絹子に知られないようにしたかとか、そういうことじゃないんだ。結果的には、そんな形になったけど」

「ぼく、ずっと座つてましたよね？ ベンチに」

「ああ。うん」

「前半も後半も、ずっと。交代のためのアップもしない。後半、交代で出たのは、あれ、二年生です。試合、出たことないんですよ。練習試合ならちよこちよこありますけど、大会とかの試合には、一度も」

「そうなんだ」

そしてぼくは伯母さんに直接言う。顔じゃなく、胸のあたりを見て。

「だからさ、試合で点なんかとつたことないし、とりようもないんだよ。背番号が13なのは、レギュラーじゃないからであつて、いい番号をほしがったやつがいるからじゃないんだ。ごめん。しょうもないうそついでた。ずっと」

「そう」伯母さんはあっさり言う。「別にいいじゃない、そんなこと」

「自分がレギュラーだった人は、みんなそう言うんだよ」

「言うでしょうね。レギュラーじゃないからお前はダメだ、なんて言わないわよ」

驚いた。え、そんなこと言っちゃうの？ と思つたのだ。自分で言わせておきながら。

ほくだけじゃなく、田崎さんも、それには少し驚いたらしい。

「レギュラーになれる人もいれば、なれない人もいる。それは当たり前。レギュラーになれなかったからくやしいと思う。それも当たり前。大人になってからもね、似たようなことは数多くあるの。会社

でもある。例えば自分だけ仕事のプロジェクトから外されたりとかね」

「あるね」と田崎さんも同意する。「今、ちょっとドキッとしたよ。自分のことを言われたのかと思っ  
た。プロジェクトから外されるって」

「そういう結果だけを重視する人はたくさんいる。でもそうじゃない人も、たくさんではないけど、  
いる。見る人はきちんと見てる。こないだの面談のとき、担任の先生が言ってたでしょ？ 顧問の先  
生が大地のことをほめてたって。わたしね、あれ、すごくうれしかったわよ。大地は試合で何点もとつて  
くれるからたすかるって言われるより、ずっとうれしかったと思う」

「あれは、そんな大した意味じゃないよ。ほら、先生は生徒を、どうにかほめなきゃいけないから」

「たととしても、うれしいじゃない。大地は先生がほめなくなる生徒だったことなんだから」

「秋月先生が気を利かせてそう言っただけかもしれないよ。五十嵐は、じゃなくて部の顧問は、そん  
なこと言っていないかもしれない」

「わたしはそうは思わない」と伯母さんは笑い混じりに言う。「でももしそうなら、それでもやっぱり  
いいじゃない。あの先生がうそをついてまで大地をほめたいと思ってくれたってことなんだから」

④ 参った。すごい理屈だ。前向き、なのか？ もしそうなら、まるで利実だ。前向きすぎる。

あの面談のとき、あそこで秋月先生にあ言われたときに、伯母さんは、ぼくがレギュラーじゃない  
ことに気づいたのかもしれない。五十嵐が言ったという、あれ。 **B**。考えてみれば、レギュ  
ラーじゃない生徒にかける言葉っぽい。

いや、もしかすると、その前に。伯母さんは、とつくにわかってたのかもしれない。例えばぼくが背  
番号13のユニフォームを持ち帰ってきた時点で。いい番号をほしがるといって、なんて言い訳のほ  
うを、それこそ苦々しく聞いてたのかもしれない。サッカーに興味がなかったからじゃなく、ぼくが  
しようもないうそをついてることがわかってたから、伯母さんは一度も試合を観に来なかったのだ。来  
たらぼくに恥ずかしい思いをさせることになるから。自身バレーボール部にいた伯母さんなら、そのく  
らいのことはわかるだろう。ただでさえ頭がいい人なんだし。

レギュラーになれないなら部なんてやめちゃいなさい。そう言われたくないから、ぼくは自分がレ  
ギュラーだと伯母さんにうそをついた。⑤ 見誤ってたのは、ぼくのほうだったわけだ。

そんなこんなで二時間が過ぎ、田崎さんが言う。

「じゃあ、僕はそろそろ」

「駅までの道はわかる？」と伯母さんが尋ね、

「うん。区画整理されてるから、すごくわかりやすかったよ」と田崎さんが答える。

とつさの思いつきで、伯母さんに言った。

「ノート買わなきゃいけないから、ぼくが行くよ。駅まで」

ちよつとわざとらしいような気もしたが、伯母さんはすんなり言う。

「そう。じゃあ、お願い」

\*

というわけで、田崎さんと二人、みつば南団地を出て、駅までの道を歩く。

まさにとつさの思いつきであつて、何を話そうとか何を訊きたいとかいうことはなかった。ただ田崎  
さんに慣れる。二人でいる時間をつくる。それだけでよかった。

「いやあ、気づかれてたとは思わなかったよ」と田崎さんは言う。「悪かったね、勝手なことしちゃって」

「いえ」

「せめて絹子さんと一緒に行くべきだった」

「だったら一人のほうが」

「ああ。それもそうか。いきなり二人では、驚くか」

「たぶん」

みつば第三公園のわきを通った。第二じゃなく、第三。第二と同規模の公園だ。駅に行くときはそち  
らを通る。

小さな女の子がブランコに乗ってた。お父さんらしき人が、後ろから女の子の背を押す。うまくこげ  
ない女の子の代わりに、ブランコを揺らしてやってる。

「あの」とぼくは言う。「田崎さんは、伯母さんと結婚するんですか？」

言葉はするりと出る。自分でも不思議だ。伯母さんには訊けないのに、この田崎さんには訊ける。男  
だから、なのか？

「おお。ストリートにきたね」と田崎さんは笑う。「でも、そうだよな。そういうことじゃないなら、  
何をしに来たのかって話になる。確かにね、僕は絹子さんと結婚したいよ。絹子さんもそう思ってくれ  
てると思う」

「そうですか」

「そうですかって、それだけ？」

「はい。あの、ぼくがどうこう言うことじゃないから」

「どうこう言っていないことだと思っよ、充分」

それには返事をしなかった。そうですよね、とも言えないし、ちがいますよ、とも言えない。

「これこそ言うべきことじゃないかもしれないけどね。僕は五年前に一度、絹子さんにプロポーズし  
たんだ。でも断られた。そのときに、妹さんのことを聞いたんだよ」

五年前。妹さんのこと。ということは、ぼくのことだろう。つまり、ぼくを引きとらなきゃいけな  
いということも、だ。

「残念だったけど、納得はしたよ。絹子さんらしいとも思ったかな。そもそもそういう面に惹かれて  
たこともあったしね。大学のころからそうだったよ。ほら、彼女、何ていうか、こう、筋が一本通つて  
るでしょ？」

「通つてますね。一本どころじゃないかも」

「そうだな。二、三本通つてるかもしれない。それも、すごく太いのが。でもね、この何年かで、少し  
変わったよ。⑦ 前にくらべて、やわらかくなった。それは、大地くんと暮らすようになったからだと思う」

そうだろうか。よくわからない。まあ、一緒に暮らすようになる前の伯母さんを、そんなには知らな  
いせいでもあるけど。

注1 秋月先生「ぼく」の担任の先生。

注2 利実「ぼく」のチームメイトの一人。

「そうでなかったらさ、一度プロポーズを断った相手と、また付き合ったりしないよ」

それは、そうかもしれない。ただかたいだけの伯母さんなら、そこはきちんと線を引くだろう。例えば父にはそうしたように。

「そんなふうに絹子さんを変えた大地くんをね、一度見てみたかったんだ。絹子さんと一緒にではなく、一人で」

で、実際に見てみたら。その大地くんは、グラウンドを駆けまわることもなく、ひたすらベンチに座ってたわけだ。

「絹子さん、健康にすごく気をつけてるでしょ？ 甘いものも食べないし、辛いものも食べない。油っこいものも食べない」

「はい」

「昔はそうでもなかったんだよ。甘いもの辛いもの、何でも食べてたし、お酒も結構飲んだ。結構というか、かなりかな」

「そうなんですか」

「そう。何で今みたいになったか、わかる？」

「いえ」

「絶対に死ねないから」

「え？」

「彼女が自分でそう言った。大地くんを引きとった以上、自分は絶対に死ねないだって。すごい人だと思ったよ。男女は関係ない。惹かれちゃうよね、そういう人には。大地くん自身は聞いたことないでしょ？ そんなの」

「ないです」

「絶対に言わないと思うよ、彼女なら。だから、あれね、僕がこんなこと言ったのは、内緒ね。もし知ったら、怒るだろうから。頼むね」

「はい。言わないです」

「何かズルいな、僕は。一人で試合を観に行ったり、大地くんこんなことを話したり。抜け駆けばかりだ。本当なら、大地くんに入られるよう、うまく立ちまわらなきゃいけないのに。何か、逆へ逆へと行ってる。まあね、もう急ぐつもりはないんだよ。今日も、世間話をするために来た。大地くんが絹子さんの結婚に反対ならそれでもいい。ただ、僕が絹子さんの仲間にいることぐらいは、許してほしいんだ。そのついでに、大地くんの仲間だとも認めてもらえるとありがたい」

田崎さんを駅の改札口まで見送ったりはしなかった。田崎さん自身が、大型スーパーの前で、じゃあ、今日はどうもありがとう、と言ったからだ。

あ、はい、と言って、ぼくは頭を下げ、大型スーパーに入った。そして三階の文具コーナーで、ノートを一冊買おうとした。本当は必要なかったが、伯母さんにああ言った手前、買うしかなかったのだ。

(小野寺史宜「ホケツ」による)

問一 二箇所ある **A** には同じ漢字一字が入ります。その漢字を書きなさい。

問二 線部①「何一つ問題を起ささない、よく出来た高校生だ」とありますが、大地はこれ聞いてどう思いましたか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 田崎さんが大地をほめた伯母さんの言葉を事実だと思ふりをして大地の機嫌をとろうとするのがわかり、白けた気分になった。

イ 一緒に暮らすために伯母さんに気をつけているのに、田崎さんの言葉から、大地の気づかいが伝わっていないことがわかって残念だった。

ウ 一緒に暮らして手間がかからないという程度の言葉で、大地と会ったことのない田崎さんが大地を話題にしているのが、おもしろくなかった。

エ 田崎さんが伯母さんの言葉を大げさに解釈し、自分を高く評価してくれていたことを知り、実際の自分を知って失望させるのではないかと心配になった。

問三 線部②「行くなと言われるかと思って」とありますが、田崎さんは伯母さんがどうして「行くな」と言うと思ったのですか。その理由としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 伯母さんが大地を紹介する前に、田崎さんが一人で行くべきではないし、伯母さんは自分の意志をはっきり伝えるような性格の人だから。

イ 伯母さんと大地がうまくいっていないことを田崎さんには知られたくないし、伯母さんは細かい事情を説明せず、結論だけ言うような性格の人だから。

ウ レギュラーでない大地の姿を、田崎さんには見せたくないし伯母さんは思っているのだが、伯母さんはそれをいねいに説明せず、一言で言うような性格の人だから。

エ 大地と田崎さんが今の段階で会って、お互いが悪い印象を持つことが心配だし、伯母さんは心配したことが現実にならないようあらゆる対策を立てるような性格の人だから。

注3 父にはそうした大地の両親は離婚した。母が大地を育て、父には会わせないのが離婚の条件で、母の死後も伯母さんはこの条件を守り、父を大地に会わせなかった。

**問四** ——線部③「レギュラーじゃないからお前はダメだ、なんて言わないわよ」とありますが、伯母さんのこの発言を大地はどのように受け取ったのですか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア サッカーにまったく関心がないように見えた伯母さんが、「レギュラーだった人」の心理をよくわかっていて発言をしたのに加え、本当は大地がレギュラーになることを期待していたことがわかって驚いた。
- イ 伯母さんがこのように言ったのは大地をなぐさめるためのものであったのだが、それどころか本心では「レギュラーじゃないからお前はダメだ」と思っていると大地は受け取り、それをはっきり言ったので驚いた。
- ウ 伯母さんは大地がレギュラーでないことに内心では不満だったことが伝わる言い方を初めて口にしたのだが、大地はその内容よりも「しょうもないうそ」をついていたことを伯母さんが責めなかったことに驚いた。
- エ 伯母さんは、レギュラーであった人の言いそうなことを説明したが、大地は「レギュラーじゃないからお前はダメだ」と口には出さないが心の中では思っている、という意味にとり、それを口に出したことに驚いた。

**問五** ——線部④「すごい理屈だ」とありますが、このように思った理由を左のように説明する場合、に入る表現を、**十字以上十五字以内**で書きなさい。

担任の先生の言葉はいろいろな意味にとれるが、伯母さんはから。

**問六**  **B** に入れるのにもっとも適切な表現を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分に厳しくできる
- イ 人のために努力できる
- ウ みんなに厳しくできる
- エ 自分のために努力できる

**問七** ——線部⑤「見誤ってたのは、ぼくのほうだったわけだ」とありますが、「見誤ってた」内容はどのようなことですか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 伯母さんは大地がサッカー部のレギュラーだと思っているが、レギュラーになれない人のつらさも、バレーボールの選手だったのだからと思っていたこと。
- イ 伯母さんは、レギュラーになれない選手のつらさはわかっているが、大地がレギュラーになれなくても、サッカー部を続けさせてくれると思っていたこと。
- ウ 大地がレギュラーでないことを伯母さんはわかっており、サッカー部の試合を観に来ないのは、それを明らかにして大地に恥をかかせないためだと思っていたこと。
- エ サッカー部のレギュラーにならないとサッカー部を続けさせてくれないと思いついて、レギュラーになつたと言った大地のうそを、伯母さんは信じていると思っていたこと。

**問八** ——線部⑥「田崎さんは、伯母さんと結婚するんですか？」とありますが、大地は田崎さんとの今後の関係をどのように考えていますか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 田崎さんには同性の親しみやすさがあるので、ぜひ伯母さんと結婚してほしいと思い、田崎さんに自分の気持ちを伝えようと思っている。
- イ 伯母さんと大地の生活に赤の他人の田崎さんが入ってくるのは不満だが、今日初めて話す田崎さんにそのことを言ってよいかどうか迷っている。
- ウ 田崎さんと伯母さんが結婚するかどうかは最終的には二人の気持ちしだいだが、自分は田崎さんとのかなりの距離を取るべきかを探ろうとしている。
- エ 田崎さんと伯母さんがどうなるかは二人の問題だが、結婚した結果自分の居場所がなくなってしまうことが心配で、田崎さんに気に入られようとしている。

問九 — 線部⑦「前にくらべて、やわらかくなった」とありますが、それはどういうことですか。  
三十五字以上四十五字以内で説明しなさい。

問題は次のページへ続きます。

問十 本文では大地の変化がどのように描かれていますか。その説明としてもっとも適切なものを次の

ア、イの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア サッカー部でレギュラーになることを伯母さんから期待されているので、ふがない自分がその期待に応えられないことを負担に感じていたが、田崎さんのアドバイスをきっかけに自分の思いすごしに気づきはじめている。

イ 周囲の状況をきちんと理解して行動できるよさがあるのに、サッカー部でレギュラーになれない負担から、自分のよさに自信が持てずだったが、伯母さんや田崎さんとのやりとりを通じて他人にはどう見えているかに気づきはじめている。

ウ サッカー部でレギュラーになれないためにチームメイトや家族の目を気にしすぎるところがあり、自分らしさを見失ってしまっていたが、伯母さんや田崎さんからのアドバイスを受けて今のままの自分でよいのだと思えるようになってきている。

エ サッカー部でレギュラーになれなくても、自分にできることを積極的に探すことで部の中に居場所を見つけ、チームメイトからも信頼されてきたが、本当はレギュラーになってほしかったという伯母さんの思いを知り、このままでいいのか動揺している。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

この頃の天気予報は、「雨になるおそれがあるので、傘を持って出かけになる方がいいでしょう」などと、天気予報以外のこともいいます。

天気予報は雨、晴れの情報だけでいいのに、「服を一枚持って出かけましょう」といったりします。サービスのつもりでいつているのだと思いますが、これは、ほんとうは自分で考えることです。

予報士に最後にいわれた、「一枚多めに着ていきましょう」という言葉がテレビを見ている人の頭に残って、そのとおりにしたら「暑かった」なんていうことがあると、文句をいったりします。でも、一枚余計に着ていくといくまいと、それはこちらの責任です。①そもそも「予報」なんですから、ほんとうのことはわからない、という大前提があります。テレビを見ても、聞いても、自分で考えるという姿勢が大切です。

腰が痛いときはこういう運動をしたらいい、健康にはこんな食べものがいいらしい、という人がいるので、「どうして?」と聞くと、よく「テレビでそういつていた」人がこういつていた」などと疑いもせずに答えることがあります。ただ何となく、だれかがいつていたからいい、と思ってしまう。テレビや新聞でいつていることをそのまま受けとり、自分で考えていないことは、日常的によくあることです。

ほかに「A」に、どんなことがあるのか、ぜひ、考えてみてほしいと思つています。

「おほれる者は薬をもつかむ」というのは、じつにいいことわざだと思つています。このことわざは、B という意味がありますが、世の中のほとんどのものごとが、このことわざにあてはまります。

ものを売りつけようとする人は、この気持ちを利用してつまずき、薬を売れば元手がかからず、もうかるので、薬を売りたい。そして、薬を買ってもらうためには、まず、おほれさせなくちゃいけない。そして、つかんだ人は、それを薬とは思っていない。これは、振りかえつてみると、とてもよくあることです。

たとえば、「若見え」という言葉をわたしは疑つています。

「このクリームで十歳、若く見えます」というようなコマーシャルがあります。「若く見えてどうするんだらう、年齢相応の美しさを目標にすればいいのに」と思いますが、まず「若く見える方がいい」と思わせて、②消費者をおほれさせ、薬をつかみたい気持ちにさせています。わたしたちはそれに気がついていません。

小じわをのばすクリームや、やせる薬など、そんなに早く効いたらこわくないだろうか? と思うほど、みるみるうちに効くというのですから、わたしは警戒します。実際に、美白効果とうたって、白いまだらができた事件がありました。

コマーシャルの短い時間の中でいいことをたくさんいおうとすると、そうなりやすいのか、棒グラフなどの統計グラフを持ちだして、説得しようとしている場面は、わたしにはかえって安易に見えます。グラフには科学的な装いがありますので、ますます信用できません。グラフは科学の所産ですが、それをよく見て内容を納得するためには時間がかかります。ところが、コマーシャルのグラフはすぐに消えてしまいます。

(中略)

わたしは、何もかも疑います。子どもの頃から疑っていました。神さまが罰を与えとか、血液型でその人の性格がわかるとか、手相で運命をいいあてるとか。わたしたちが一番知りたい明日のことや、一寸先の闇について、想像することはできません、それを科学的に説明することはできないと思ひ、それを知る超能力のある人の存在を疑いました。

戦時中、「写真週報」という一種の雑誌に載っていたと、先生が話してくれたことで、いまでも覚えていますが、ピラミッドの中に道がついていて、それは謎の地点でへこんでいたり、曲がついたり、変化しながら前に進んでいるというのです。その変化のタイミングは、なんと、世界史を予言するかのよう、に、史的大事件の起きる時期とピタリあてはまるというのです。そして、太平洋戦争にあてはめて、最後の事件が起こったところから、次に変化するところまでを測ってみると、あと四年でこの戦争(太平洋戦争)は終わるといふのでした。

わたしは信じなかったけれど、この戦争があと四年で終わる、という話は、人を信じさせる魔力がありました。③「待望」と「予言」がひとつになったとき、人々は理性を失つて、何かにすがるように流を信じようとしたのです。

④のちにピラミッドの中に入ったことがありますが、入り口から王の墓までは直線で、曲がつてはいませんでした。

「よつて、件の如し」という成句を知っている人は少なくなりました。「件」とは、漢字の形のおり、顔が人間で、体が牛の姿をした怪物のことで、その怪物が生まれると、一回だけ予言をするといわれていました。

戦争の末期には、その不思議な牛が、岡山県のどこかで生まれ、人間の声で、「戦争はあと四年で終わる」といい残して死んだのだそうな、という流言を信じた人がありました。これも、戦争が終わってほしいという「待望」が「理性」を失わせたのです。

(中略)

人の意見にまどわされないようにするためには、どんなことにも、心が動かされない頑丈な地点に立つて、つまり人がどうあろうと、自分はあわてない、という堂々とした考えかたが必要になります。

テレビでこういつていた、新聞にこう書いてあった、などと、自分の意見はなく、ただただ人のいうことを本気にするだけというのは良くないと思います。

「自分で考える」ことは、前向きの姿勢の第一歩です。自分でやろうという気持ちが大それた、わたしは思っています。

以前、あるサイン会でこんなことがありました。

絵を描いている人から、小さい声で「どんな鉛筆を使っているんですか。紙は何ですか?」と聞かれました。そのときわたしは「いくらでも教えるけれども、わたしに聞かないほうがいいのにな、自分で見つけた方が勉強になるのになあ」と思いました。

自分の考えで責任を持つてものごとに取りくめば、たとえ失敗したり、間違つたりしたとしても、改めることができます。ところが、最近、親が〇〇学校へ行くのがいいといったからとか、〇〇試験を

注1 流言(根拠のない噂)

受けたらいいといったからなど、自分で考えればいいのに、と思うことまで人任せで、自分で選ぶ力がなくなっているような気がします。

自分で考え、判断することの中から、これはほんとう、これは嘘、とものごとを見極めていけるようになりたいと思うのです。「学問」とは、何がほんとうか、何が嘘かを判断していく、そのためにあるのだともいえます。

「自分の考え」がなくなってきたり、ということとは困ったことで、「自分の考え」がないと、無責任になつてしまいます。人の意見に振りまわされたり、まどわされたりして過ごすようでは、おもしろくない生きかたになつてしまいます。

人間は何でもできる、と思つていては、昆虫や動物、植物など、自然のものは作れません。動物行動学者の日高敏隆さんが、「自然はよくできている。たとえば、鼻でものをつかむゾウなんて、人は考えられなかつたろう」といつていました。

自然にはかきません。でも、自然にかなわない、と思うためには、自然を知らなければなりません。霊長類学者の河合雅雄さんの本で読んだのですが、キョクアジサシは、最も長い距離を移動するといわれる渡り鳥で、だれに教えられたわけでもないのに、白夜になる場所を知つていて、北極と南極の間を行つたり来たりするそうです。

ほ乳類の赤ちゃんも、だれかに教えられたわけではないのに、おっぱいを飲みます。生まれてすぐに、大きくなろうと一生懸命です。

そのような自然の姿には、頭がさがります。絵描きなんかよりも、はるかに自然はすごいものです。申しあわせたわけでもなく、本能的（遺伝子的）にそうなつていて、そのことに感動します。

以前、国語の教科書を作ることになつて、「水」について取りあげたほうがいいだろう、ということになりました。わたしは絵を担当していたのですが、水について書かれた文章を読むと、「水がないと生きていけない」などと、ただ水を賛美するような内容で、おもしろくない。水というのは、水害だつたり、津波となつて押しよせたりというように、人間にとってはおそろしいほどの、ものすごいエネルギーを持つ側面がある。水の本質を書かないで、ありきたりなことを書いても意味がないと思ひました。自然の水が持つ力はすごいもので、人間がかなうものではありません。

自然の中で生きていくことを知り、その自然に心を動かされた経験が積みかさなつて、自然に対する畏敬と、「美しい」と思う感性が育てられていくのだと思います。

あるとき、津和野の美術館建設にかかわつた大工さんに「木の年輪つて、なんてきれいなんだろう」と話したら、「それは自然が百年かかって描いたんですから」といつていました。

わたしたち人間も自然の中のいきもので、人間も死にます。そのことがわかると、ただ長生きすればいいというものではない、ということもわかります。そして、自然というものを畏敬の念を持つて見ると、我々人間などは、取るにたらないものだと思ふことができます。⑤ 自然を知ること、自分の大き

注2 霊長類―霊長目のほ乳類の総称。ゴリラやチンパンジーなどのサル類が属し、ヒトも含まれる。

注3 畏敬―心からおそれやまうこと。

注4 津和野―島根県の南西部の町。筆者の出身地。

さもわかつてきます。

「自然」とはどのようなものかを知ろうとした日高さんは、そんなことを哲学者より、わかつていたと思います。

わたしは、街から街、国から国へと、ときに迷いながら旅をして、スケッチをしてきました。その場で腰をおろして絵を描いていると、その絵がうまくいかなくても、何とも心豊かな時間が過ぎていきます。そして、不思議なことに、同じ時間をかけていても、普段よりもたくさん絵が描けます。そこに立っている木に、何を感じて描くか。そのことで絵は違つたものになるのだらうと思つています。

実際にスケッチをした場所は、写真で見た場所よりも、ずっと心に残るものです。写真を見て絵を描くことはできませんが、わたしの場合、その写真に似た絵は描けても、実物を見て描いたものとはどこか違つてきます。人と会つたときがいい例で、写真で見た感じと、実際に会つた感じが違うことがあるのと同じだらうと思ひます。

スペインを旅していたとき、ここで絵を描いたらいいかな、と思う場所がありました。でもはるばる日本から来たのだし、もつといい場所があるだらうと、先へ先へと進んでいきました。そして、「やっぱり最初に出会つたあの景色がいいな」と戻つてみたのですが、動かないはずの風景が、変わつていくのです。せつかく描きに戻つたのに……と思ひましたが、風景だからいつも同じものがそこにある、というほうが間違いなものでした。そもそも、太陽や雲の位置が違いますし、船も同じ位置にいるわけではありませぬし、天候も変われば、何より自分の気持ちも変わるので、その場所に戻つてみても、最初に出会つた景色ではなくなつていくわけです。よくわたしが、「スケッチをするのは、景色とのお見合いだ」といつと、みんな笑いますが、冗談ばかりではありません。

スケッチをするために旅をして、道に迷つたり、宿が見つからなかったり、山の中の霧でおそろしい目にあつたり、旅の苦労話はずきませんが、それでもやはり、その場に行つて、スケッチするのはたのしいことです。

デカルトは、あらゆる本を読みつくしたあと、旅に出ました。実際に世の中に入つて、世間と交わつて、さまざまなことを学びとつていこうとしたのです。

### （中略）

⑦ 本を読まないでも、生きていけます。でも、本を読んで生きた人は、同じ十年生きていても、三十年も生きたことになりません。本にもいろいろありますが、多くの本には勉強し、苦勞し、発見した先人がのこしたことが書いてあります。

たとえば、「アメリカ大陸を発見するきっかけになつた、コロンブスの苦勞」は岩波文庫で、たつたの数百円で読めるのです。

本を書くとき、人は漠然と書くのではなく、言葉にする段階でよく考えています。それが、本をすすめる理由のひとつです。本はその著者が責任を持つて、発言していると、デカルトもいつています。

本が読まれなくなつたことは、文明の変化ともいえますが、わかりやすくいえば、テレビや、スマートフォンを持つ手軽なおもしろさに押されてしまつたのだと思ひます。テレビは積極的に「おもしろ

注5 デカルト―一五九六―一六五〇、フランスの哲学者、数学者。

「さ」をわたしたちにさしだし、「おもしろがらせて」くれます。それに対して、本は、「自分で読む」ということをしなければ「おもしろさ」がわかりません。そして、こちらから積極的に働きかけなければ、何もしてくれない、という違いがあります。

テレビや映画は、受け身で見ることができません。特にテレビは、視聴者（しちやうしゃ）をできるだけたくさん集めようとするので、見る人があまり考えなくても楽にわかる、あるいは知ることができるようにならされています。

一方、「本を読む」ということは、文字で書かれた場面や時間の経過を、自分自身でつかんでいくこととなります。

もちろん、テレビや映画でも台本は「本」ですから、ディレクターや、監督（かんとく）など、制作者はそれがなくては仕事できません。けれども、見る方は、その「本」を制作者が調理したのを見ています。

本は、自分が行こうとしなければだれも連れていってはくれません。それと比べて、テレビはつけてしまえば、勝手に情報がやってくるので、自分でその道をたどらなくても、最後まで連れていってくれます。その意味で本とテレビとは比べて考えるものではないのかもしれない。

そもそも本は、ひとつの道を自分でたどりながら読み、内容が理解できていく、そのことがおもしろいのです。

「本を読む」ことと、「自分で考える」ことはつながっていると私は思います。

「本を読む」ことは、自分の考えかたを育てることです。とにかく、子どもたちには、自分で考えるくせをつけてほしいと思います。だれか偉い（うまい）人がいつていたからとか、テレビでいつていたからとか、判断を他人に任せるようではつまらないではありませんか。でも、自分で考えるためには、日頃の訓練が必要です。頭がやわらかいうちに、たくさん本を読んで、世の中にはいろんな考えかたがあることを知りたいものです。

本を読むことは、ひとりの仕事ですから、競争にはなりません。また、表面だけきれいにするお化粧（けいしょう）に比べて、本を読んでいることは、ほかの人にはわかりません。けれども心の中は美しくなり、ひそかに誇り（ほほ）を持つことができるのです。

（安野光雅『かんがえる子ども』による）

問一 — 線部①「そもそも『予報』なんですから、ほんとうのことはわからない、という大前提があります」とありますが、この「大前提」を筆者は別の箇所（かしょ）でどのように言いかえているでしょうか。それを表すもつとも適切な表現を本文から探し、**五字以内**でぬき出して答えなさい（句読点・記号も一字に数えます）。

問二 **A** に入れる表現としてもつとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 頼（たの）むことができる情報を求めていくこと
- イ 考えつづけていかななくてはならないこと
- ウ 受けとめたうえで理解していくべきこと
- エ 考えなくてもすむようになっていくこと

問三 **B** に入れる表現としてもつとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 役に立たないものでも、困っているときはすがってしまおう
- イ 最悪の事態になって困ると、かえって意外な活路が開ける
- ウ 助かりそうもない非常に危険な状態から、どうにか助かる
- エ 苦しいことも過ぎてしまえば、その苦しさを忘れてしまおう

問四 — 線部②「消費者をおぼれさせ、薬をつかみたい気持ちにさせています」とありますが、それはどういうことですか。その具体的な例として**適切でないもの**を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人々が限定グッズの宣伝広告を見ることによって、販売店（はんばい店）に殺到（さつたう）すること。
- イ 人々が無料のゲームに親しむことによって、有料ゲームに誘導（ゆうどう）されること。
- ウ 人々が季節の流行を取り入れて、新しい洋服（よふく）や靴（くつ）を買いそろえていくこと。
- エ 人々が季節の移り変わりに応じて、旬（しゅん）の食材を料理に取り入れていくこと。

問五 — 線部③「人を信じさせる魔力がありました」とありますが、それはどういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人々が将来に期待する出来事がやがて実現すると発言すると、その出来事が起こりうることを。
- イ 人々が今後に望むことを言い当てる人物が現れると、その人物を信じ、心から頼りきること。
- ウ 人々が未来に期待していることが今後起こると言われると、思いがけず信じたくなくなることを。
- エ 人々が過去に待望したことが未来に現実になることにより、冷静な判断ができなくなることを。

問六 — 線部④「のちにピラミッドの中に入ったことがありますが、入り口から王の墓までは直線で、曲がってはいませんでした」とありますが、それはどういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人類の意志や想定をはるかに超えている歴史の存在を、人間が想像することはできないこと。
- イ 世界規模での人類の歴史の進み方は一直線であり、変化の時期を予測することが難しいこと。
- ウ 科学的に説明することはできないあらゆるものを、一つ一つ地道に検証しつづけること。
- エ 人々が他人の言葉を飲みこみ、ものごとを確かめなかったという失敗が明らかになったこと。

問七 — 線部⑤「自然を知ること、自分の大きさもわかってきます」とありますが、それはどういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自然のすばらしさとおそろしさに畏敬の念を持つことによって、人間が長生きすることはあまりよくないと判断できるということ。
- イ 自然の営みに感動して、その偉大さを感じ取ることで、自然の中で人間の生活が営まれている事実を理解できるということ。
- ウ 美しく大きな自然に包まれて生きていると思うことによって、人間が他者の意見にまどわされずに、楽しく生きられるということ。
- エ 自然の力強さに人間は太刀打ちできないと知ることによって、人間が本能的に生きなくてはならない現実を実感できるということ。

問八 — 線部⑥「スケッチをするのは、景色とのお見合いだ」とありますが、それはどういうことですか。次の□にあてはまる形で四十字以上五十字以内で答えなさい（句読点・記号も一字に数えます）。

スケッチとは、□ことである。

問九 — 線部⑦「本を読まない」とありますが、「本を読まない」ことでどのようなことがもたらされるかと筆者は考えていますか。その説明としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 勉強し、苦勞し、発見した先人がのこした知恵を知ることができないので、本を読んだ後に旅に出るきっかけが失われること。
- イ 文字で表現された内容を進んで理解するような機会がなくなり、単なる文明の利器の手軽なおもしろさで満足してしまうこと。
- ウ 文明の利器の手軽なおもしろさに押されてしまい、テレビや映画を見ることに比べて、読書を楽しむことができなくなることを。
- エ 文明の変化を通じ、テレビやスマートフォンが積極的にももしろさを提供することでのみ、考える楽しさを人々に与えること。

問十——線部⑧「本を読む」とありますが、様々な本をたくさん読むことの利点について筆者はどのように考えていますか。本文全体をふまえてつづ説明している文としてもっとも適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分のゆるぎない意見を大切にして、他人の意見にまどわされずに考えることによって、先人が苦勞して勉強や発見をしたときの心情に寄りそい、さまざまな場所をめぐる旅を通じて心を豊かに成長させ、前向きの姿勢で他人よりも満ち足りた人生を送ることができるということ。
- イ 自分の考えを基本に置いて、他人の意見を批判する一方で世の中のさまざまな考えかたを吸収し、周囲と協力して責任ある行動をすることによって、文明の変化に対応しながら失敗や間違いを改め、ものごとがほんとうか嘘かどうかを見極め、堂々と将来を決められるということ。
- ウ 自分の力で考え、他人の考えをあてにせずにテレビや新聞、コマーシャル、映画などの内容を正しく理解することによって、何がほんとうで何が嘘かを判断し、自然の本質を見極めて、過去の歴史から未来の行く末を推測しながら自分で将来の進路を選ぶことができるということ。
- エ 自分で積極的に考え、他人の意見に振りまわされずに世の中のさまざまな考えかたを知り、責任を持つてものごとに取りくむことによって、失敗や間違いを改め、ものごとの真実と嘘を判断し、心の底から自信を持って自分の将来の目標や生きかたを選ぶことができるということ。

問十一——線部⑨「見る方は、その『本』を制作者が調理したのを見ています」とありますが、それはどういうことですか。四十字以上五十字以内で答えなさい(句読点・記号も一字に数えます)。

(以下余白)

# 国語解答用紙

受験番号

氏名

※注意!! 解答欄は設問の順序通りにはなっていないところがありますので、まちがえないこと。

↓ここにシールをはってください↓

一

⑨	⑤	①
⑩	⑥	②
	⑦	③
	⑧	④

二

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問十

三

問九

問十

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

三

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問八 スケッチとは、

40

50

いよびある。

問十一

50

40

